

戸隠山記 「落原拾葉續卷百八十六の四十」

長野県上伊那郡教育会編の「落原拾葉」第8輯に収録されているが、解題によれば中村元起の「駒嶽紀游」の附であり、駒嶽登山は天保（一八三〇年から一八四四年）の末と推測されている。それが「戸隠山記」にも当てはまるかは不明。

戸隠山記

信之戸隠山其神曰手力雄命廟號戸隠大明神天祖即位神爲佐命排？之功載在國史廟祀數千載官歲給神封二千石置僧奉香火曰顯光寺神祠在山半登三十里祠傍有龍王祠每日供飯迨撤無有餘粒通一歲凡用八十石米祈之者必進梨置之神案拜禱而

出食梨子之聲嚼々然聞于祠外明神之奥院

凡諸神祠其部屬之神別有祠者謂之撰社使令之神謂之末社其祠在本祠

域中者越在他所者通稱之本祠正殿之外有便殿在本祠後者不論其相距遠近通稱奥院義猶人家有堂有室云

在大日峯行五十里有一泉圍可

數尺小黑蟲無數塞水面人折樹枝畫一圓相於水面呪請曰神明願賜圓相内水呪異虫四散乃始得掬飲飲畢虫復如故一呪唯充一人用有同行者呪必如其人數本祠到峯頂唯此一水而已行數

里到七里松松五？者數萬株生左右谷交梢低而塞路枝如藤蔓
柔軟不折纏累他樹密而無？如布綠？穉人蹈之行路益窄益高
又行數里到劍峯險稱其名蓋自本祠到劍峯頂約二十里危險無
比而奇幻亦無比云而大日峯尚隔一谷絕崖峭壁非挾翼者不能
達焉大日峯爲明神奧院而眞凡隔絶無有祠宇唯有石造大日如
來像在峯半腹隔谷望之雲霧杳冥不能諦視山中時現佛光又屢
起五色雲奇卉仙草珍禽異獸甚多而巨？鷲鳥猛獸與世所謂天
狗者又屢傷人登者必雇土人爲導齋戒唯謹自六月朔始盡晦而
止他月禁登云

註 「露原拾葉」第8輯は国会図書館デジタルライブラリに

掲載され (DOI 10.11501/116519)、その42コマ目が

「戸隠山記」。